

# 第1回堺市文化芸術審議会部会 議事録（要旨）

## 1 開催日時

令和2年2月7日（金）10時～12時

## 2 開催場所

堺市役所 本館地下1階 会議室B

## 3 出席委員（50音順・敬称略）

砂田 和道 委員 （くらしに音楽プロジェクト事務局長）  
中川 幾郎 委員 （帝塚山大学名誉教授）  
花村 周寛 委員 （大阪府立大学経済学研究科准教授）  
弘本 由香里 委員 （大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所特任研究員）

## 4 事務局職員

文化部長、文化課長 ほか

## 5 関係者

NPO法人こえとことばとこころの部屋 代表 上田 假奈代氏  
堺市文化団体連絡協議会会長 ほか  
与謝野晶子倶楽部会長 ほか  
公益財団法人堺市文化振興財団事務局長 ほか

## 6 議題

- （1）部会長の選出について
- （2）補助金事業及び負担金事業の検証について

## 7 議事録要旨

開会

---

## 議題

### (1) 部会長の選出について

---

<事務局より説明>

○花村委員

役割的には中川委員を部会長として推薦いたします。

●事務局

花村委員から中川委員へのご推薦がありましたけれども、皆様いかがでしょうか。

それでは、異議なしということで、中川委員に部会長をお願いしたいと思います。中川会長、議事進行よろしく願いいたします。

◎会長

それでは、改めてよろしく願いいたします。円滑な会議運営に努めてまいりますので、皆さまのご協力をよろしく願いいたします。

●事務局

次に、規則第5条第3項に基づきまして、会長代理の方を会長から指名いただきたいと思っております。会長、どなたか、指名いただけますでしょうか。

◎会長

今日のご欠席のようですけれども、審議会と同じように、原委員をお願いしたいと思いますので、事務局からよろしくお伝えください。

## 議題

### (2) 補助金事業及び負担金事業の検証について

---

【堺市民芸術祭開催事業】

<事務局より説明>

<堺市文化団体連絡協議会より説明>

◎会長

以上の説明について、ご意見・ご質問あれば砂田委員からお願いします。

○砂田委員

基本的な質問をいくつかさせていただきたいのですけれども、一点目は、文化団体連絡協議会に、堺市内の文化団体の総数に対して何割ぐらいなのかというのをまず知りたいと

思いました。二点目は今回いくつかの事業を検証するにあたって、今日の堺市民芸術祭、あるいは堺市展、美術協会展など、一年間の中で、市民の文化団体は何回くらい発表の機会があるのか。三つの芸術祭的なものがあるんですけども、その辺のすみ分けとか、あるいは重複しているとかそういう状況を知りたいなと思いました。

#### ■堺市文化団体連絡協議会

現在文化団体は会員数で申し上げますと約 9,000 人、団体数は 111 団体が加入している状況です。堺全体にどれだけの文化団体がいるかという把握しておりませんが、今そういうことになっております。二点目ですが、堺市展は、堺市と堺市文化振興財団が共催する公募の美術展で 11 月頃に開催するのが一つと、美術協会展は、堺美術協会が 3 月か 4 月の春に展覧会をされています。ここは文団連の補助金とは別に出ています。美術協会は文化団体連絡協議会の会員にも入っているという状況です。

#### ○砂田委員

そうしますと、美術分野の方は複数回発表の機会があるであろうとはわかったんですけども、それ以外の文化活動の分野の方は一年間でいろんな団体が集まって発表するというのは堺の場合は 1 回でしょうか。

#### ●事務局

市全体で我々も把握しきれていないところもあるかもしれませんが、例えば地域文化会館ですと、榎文化会館では定期的に文化活動を行っているサークルが一年間の発表の場として榎文発表会というのを行ったりとか、区役所の方でも例えば秋に区民まつりをやっておられまして、そこで文化芸術部門の中で、地域で活動されている方が発表したりとか、いろんな形でいろんな主体が活動しているというのはございます。

#### ○砂田委員

イメージはわかりました。

#### ●事務局

堺市民芸術祭や堺市展など、非常に規模が大きな発表の機会もあれば、地域ごとの活動というのもあると思います。

#### ■堺市文化団体連絡協議会

ですから、例えば文化団体連絡協議会の会員に入っている団体さんも、自らの自主的な定期公演とか、あるいは自分たちの発表の場というのは、別にまた開催しておりまして、それとは別に、市民芸術祭に向かってそれぞれの団体が集まって発表をしています。

#### ○砂田委員

わかりました。ありがとうございました。

◎会長

花村委員いいですか。

○花村委員

まず、堺市民芸術祭の参加者の方は 11,611 人ですけれども、この内訳はわかりますか。例えばそのうちの関係者と発表者はどれくらいか、あるいは年齢構成はどうなっているか。データはありますでしょうか。なぜそれを聞くのかというと、先程後継者の育成の話をしていただけども、若い人がどれくらい入っているのかというのが気になりまして。あと所属しているのが 111 団体、9,000 人、その 9,000 人と 11,000 人との、それ以外の方々というのがどれくらい開かれているのかということをお聞きしたい。

■堺市文化団体連絡協議会

まず平成 30 年度の実績で言いましたら、まず加盟団体が 110 あるんですが、実際 93 団体が参加されております。参加者数で言えば、1,881 人ですね。年齢構成につきましては特に統計はとっておりませんのでどれくらいの年齢構成になっているのかというのはございません。

○花村委員

発表者と関係者 1,881 人以外ですね、それ以外はのご家族であったり、ご友人であるとか、それ以外に広がりがあるという理解でよかったですのでしょうか。

■堺市文化団体連絡協議会

私の感覚から申し上げますと、洋楽部会で言うと、発表者、演者は、それが 8 団体か 9 団体出ますけれども、20 人の団体もあれば 40 人の団体もある。全部合わせると 300 人になるんですね。ここに書いてある入場者数というのは、いわゆるお客さんとして入った人数をカウントしています。それ以外には演者として 300 人くらい出ています。入場者とは別に。

○花村委員

11,000 人の中に 1,800 人は入っていない。11,000 人は演者以外のカウントということでもいいんですね。

■堺市文化団体連絡協議会

そうですね。

○花村委員

ありがとうございました。

◎会長

いいですか。では弘本委員。

○弘本委員

古典芸能とか古典的な芸術を中心に継承と発信にすごく尽力されていると思うのですが、毎年市民芸術祭をされるにあたって、パンフレットを拝見すると、大体部会ごとにまとめて企画を考えられてそれを出し物として展示とかされていると思うんですが、全体の芸術祭として今年はどういうテーマでやっていきたいとか、そういう企画全体にかかわる議論みたいなことはなさっているのか。もしなさっているとしたらどういう議論が毎年出てきているのか、そのあたりも少し教えていただければと思います。

■堺市文化団体連絡協議会

各部会で今年のテーマをまず考えます。今年度はフェニーチェですることによって、全部会がいろいろと企画を練って、舞台上でコラボできるものがあるときにははしていただく。特に私は邦楽の方をしておりますが、伝統文化を継承するのに子どもたちを育成することがとても大変なんです。今回その子供たちだけで、140人ほどの演奏者が、お琴の演奏をします。それに尺八の2人に洋楽の方たち、吹奏楽の方にもお琴の和楽器のことを理解していただきたい。コーラスの方にも和楽器の楽しみも覚えていただきたいという風な形でやっています。今までも毎年の芸術祭のときにも折に触れていろんな違うジャンルの方にも和楽器の楽しみを一緒に覚えていただき、子どもたちの演奏を優先的に舞台をつくってました。

○弘本委員

ありがとうございました。

◎会長

いいですか。ありがとうございます。

○上田様

後継者の育成を大切な目標とされているようなのですが、様々な活動はその苦勞がありますけれども、表現活動の中では、技芸を発達させること、それからそれらを発表するために運営していく、マネジメントのところが重要でございますよね。技芸が上手になる人とマネジメントを支えていく人は協議会として、例えば勉強会をするとか、あるいはそれぞれの団体の悩みごとを共有するような場、発表をどうしましょうという話ではなくて、運営そのものを共有していくような勉強会とか、そういったものは設定されているのでしょうか。

■堺市文化団体連絡協議会

どこかどこかがコラボして、何か違う表現を出したいということをみんないつも考えていると思うんですけども、なかなか若い方が入ってきていただくのが大変難しい今日この頃でございます。

○上田様

例えば堺市のことを存じていないんですけども、大阪市内でしたらときどき、マネジメント育成のセミナーや、助成金の書き方のセミナーなどがときどき行われているんですけど、そういう情報共有をされたりというようなことは。

■堺市文化団体連絡協議会

そういう具体的なことはないんですけども。ただお互いの活動を会員が見に行くとか、見に行ってそれを勉強させていただくということは常にやっております。

○上田様

特別そのことで定例会議があるとかそういうことはないんですね。

■堺市文化団体連絡協議会

ないですね。文化というのは個々の自主性がすごく大事だと思っております。ですから今年は全体でこれをやりましょうという、それぞれの団体のやりたいことをある意味押さえつける懸念もあるので難しいところなんですけれども。同じ部会では同じような悩みがありますので、うちであれば洋楽の部会の皆さんが、年に何回も集まりますけれども、そういう中で悩みであるとか、いろんなことについて情報の交換をしながら解決策をやっていこうということは、こういう組織があるからこそできることだなと思っています。発表というか、お客さんの数も大事だと思いますが、自分たちの文化をつくるという、文化の工場を私たちがそれぞれ培っていくと。それをお客さんに対してご覧いただくということももちろん大事なんですけれども、ご覧いただくことばかりをするのはプロの皆さんがされるので、私たちは作るということが、やっぱり市民文化の作り手でもあるので、発表の場でもあると、この両方を兼ね備えているということです。両方の悩みがあるんですね。ただ単にお客さんだけを呼べばいいというものではなしに、私たちは文化を作るうえにおいてどういう悩みがあってどういう場所とか環境整備をするとかそういうことも非常に大事だと思っておりますので、この組織はそういう悩みがあると理解しながら話し合うということにもなっている、非常に有意義だと思っています。

○上田様

文化を作っていく工場であるという、そのことと堺市民との関係は、どのように。その文化は堺市民にとってどういうものであるか。

■堺市文化団体連絡協議会

これが一番大事なことで、初めに言いましたようにこれをして堺市民の受け方がどうかということが一番大事なんです。喜んでもらっている、楽しんでもらっている、勉強してもらえると、中へ入ってきていただけるような会でなければだめだと。

○上田様

市民の方が入ってきてもらえるような機会を作っていく。そのことから市民の人たちは文化の表現と一緒に参加することからどうなっていくのですか。

■堺市文化団体連絡協議会

参加できるようになって、例えばお花でしたら、お茶でも体験コーナーを作ったり、そこに入ってきていただいて一度それに参加いただいてその良さとか楽しさを知っていただけるかなとは思っております。

○上田様

その良さというものをそれぞれの例えば暮らしの中に生かして。

■堺市文化団体連絡協議会

自然に入っていたらいいと思います。

○上田様

自然に、生活の中に。

■堺市文化団体連絡協議会

入って行っていただいたらありがたいなと思いますね。

○上田様

そうしたら様々なやり方、おっしゃるとおり、実際に活動しておられるそれぞれの方々が悩みを共有しながら活動を続けていくこととそれを発表していくこともあるけれども、生活に根差していくためにはまた違うアプローチが必要かもしれません。

■堺市文化団体連絡協議会

違う面が出てくる可能性もあります。堺としてはそれでやっぱり文化芸術の堺といわれるように、広く広げていきたいということを考えております。文化団体連絡協議会が先頭に立っていくのがいいんじゃないかなと思っております。みんなを引っ張っていく、そういう力になればなど。芸術祭も毎年趣向を考えながらやっています。

○上田様

きっと引っ張っていくというのは力強くいいんですけども、市民の人々のそれぞれの生活やいろんな状況の中を生きていますから、引っ張るというよりむしろ寄り添うという関係も大事かと思います。

■堺市文化団体連絡協議会

一緒になってやれるというところに持って行けたら。

○上田様

そういうとき「下りる」という言い方がありますが、自分たちが下りていくということも必要かもしれません。

■堺市文化団体連絡協議会

家庭環境が変わりましてね。昔のように花を生けて楽しむという発想がない。そうするとその時期にあうということを教えていくという風に変えていかないといけないとみんな考えてそれに携わっています。

◎会長

よろしいでしょうか。どうぞ追加でご質問ございましたら。

○砂田委員

文団連さんは 111 の団体がいらっしゃるということですが、ざっくりでいいんですけどもこの 100 からの団体の個々の団体はどういうきっかけで発足されてきたか。例えば公民館の社会教育の講座で何か講座があってそのあと自主グループになる流れがある、よく全国であるんですけども。おそらく 100 の団体は歴史も長いのではないかなと思っているんですが、そもそもどういう始まりでだったかなというのは、わかる範囲でよろしいのですが。

■堺市文化団体連絡協議会

70~80 年前のことなので、はっきりしないのですが、その時にその方が必要と思われて。

◎会長

答えにくいですね。

○砂田委員

なぜこのような質問をしたかといいますと、皆様社会教育、生涯学習活動をされているわけですね。ここまでの質疑応答は、その個々の団体の抱えている課題、問題を伺っているのですが、それは非常に重要なんですけども、今回の資料をいただきますと、実施主体が文化団体連絡協議会となっていますけれども、この芸術祭においては出演されたり作

品を展示するというパフォーマーなわけですね。実施主体という言い方ではないと思うんです。おそらく芸術祭を運営するにあたっての事務局機能がどうなっているのかということが一番の課題なんです。冒頭のご説明の中で事務局は堺市文化振興財団が担っているということでしたが、財団の作業の内容は何をされているのか、ということをお教えいただけたら。

■堺市文化団体連絡協議会事務局（公益財団法人 堺市文化振興財団）

事務局として、それぞれ発表する場、舞台でしたら施設を借りたり、後はその分で発生する費用が掛かりますので、皆さんで配分するような作業はさせていただいています。ですからこちらの方で領収書とかを集めてチェックさせてもらったりとか、基本的には全体の芸術祭全体でかかる共通の経費、チラシを作ったり看板を作ったりの経費と、あとは借りる場所の経費をさせてもらうのと、例えば舞台芸術でしたらステージ屋さんの人件費や、消耗品、費用を領収書に基づいて配分させていただいたり、そういう事務的なところをさせていただいたり。あとは文化団体連絡協議会の電話を引かせてもらったりホームページを立ち上げたりしています。

○砂田委員

少し細かい質問なんですけれども、予算書の方に移りたいのですけれども、収支予算書ですね。この支出の部の賃金とか、委託料ですけれども、賃金、アルバイトとありますけれども、どこが支払って、どなたが受け取っているか。

■堺市文化団体連絡協議会事務局（公益財団法人 堺市文化振興財団）

財団でアルバイトを雇いまして、芸術祭に係る分のアルバイト賃金を文団連が支払っております。

○砂田委員

わかりました。委託料 3,165,000 円なんですけれども、これにおける人件費というのは、どのような方が受け取っていますか。

■堺市文化団体連絡協議会事務局（公益財団法人 堺市文化振興財団）

これは例えば舞台でしたら、ステージ屋さんの委託ですね。あるいは設営関係でしたら運搬してもらうために運ぶ人員とか、あるいは美術展でしたら監視の警備員の人件費です。

○砂田委員

委託料の最後の欄で 6,417,000 円というのがありますね、その会場設営というのは上の舞台展示人件費とはかぶらないんですか。この会場設営とは美術関係の会場設営になるのか、それとも舞台公演における会場設営も入ってくるのか。

●事務局

会長、恐縮ですが時間もございますので、事務局から後日お伝えいたします。

◎会長

はい。ほかに追加でありましたら。どうぞ花村委員。

○花村委員

審査というより一緒に考えたいなと思っているので、忌憚のないところをお聞かせいただきたいのですが。堺市民芸術祭自体は入場者数の問題ではないと思っているのですが、内と外とのコミュニケーションというのですかね。団体全体と外とのコミュニケーションというのもあるんですけども。さっき上田さんがおっしゃっていた、内部での部会同士のコミュニケーションがどれくらい起こっているのかを知りたいと思っています。たとえば邦楽の方と劇の方が美術の方と茶道の方という間でのコミュニケーションといいますか、要するに堺市民芸術祭自体が全体の部会のプラットフォームになっているのかということを知りたいのが一点目ですね。みんなに触発されて表現のあり方が変わったりとか、茶道の方が美術の作品を見て変わったりとか、あるいは忙しくて皆さん同じ時間にやっているの、ほかのところに見に行けないとか。

■堺市文化団体連絡協議会

お互いにその疎通はできていると思うんです。私から言うのも変なんですけども会員同士はすごく仲がいい。それでコラボもときどきやっていますので、仲がいいと思っております。

○花村委員

堺市民芸術祭自体がほかの人と出会う機会になっているということでしょうか。

■堺市文化団体連絡協議会

そうですね。ときどきどこかへ行ってコラボする。それは多々あることだと思います。歌の方もそうなんですけれども、歌と踊りとされたり、お茶と、お花では外へ行って、晶子フォーラムも次に出てくると思うんですけども、晶子の催しでもコラボさせていただいている。対外的にもそれは参加させていただいているような関係になっていると思いますね。

○花村委員

茶道の中で、美術の人が入ったりすることがあるということですか。例えばですけど。

■堺市文化団体連絡協議会

それはありますね。

○花村委員

邦楽の中に洋楽とか。

■堺市文化団体連絡協議会

邦楽部会なんですからけれども、歌と踊りをコラボしておりますし、そういうのは毎年度、うまくコラボさせていただいているのではないかと考えております。私たちは自分たちのステージ以外の日に、お互いに会員には見に行ったり聴きに行ったりするようになっております。お互いにやろうと私たちの方にも来てくださっていらっしゃいますし。

○花村委員

自分のところに行ってパッと帰るような。

■堺市文化団体連絡協議会

それはないです。強制ではないんですけれども、お互いにやろうということを阿吽の呼吸でやれている。こういう冊子を作っていますし、部会の役員会、各部会から集まった人たちが日常的に話し合っています。ホームページも作ったり、新しいサークルといいますか、文化に携わる団体さんができたとか私こういうことしたい、というときにどういう団体が堺にあって、どういう組織に入ってという初心者でも初めての方もこういう組織があることで、こういうのがあるのかということに入ってこられて、新しい市民団体さんが見えになるということもありますので。この組織がなかったら、堺にいくつ団体があって、どんな活動をしているのかということも、非常に情報が薄くなると思いますので、それは非常にこの組織が活躍している市民にも目に見えることになっているのではないかと思います。

○花村委員

組織の中で先程技芸とマネジメントという話があったと思うんですけれども、技をお互いに表現力を磨いていくということとはされているとして、一方でどうやって運営していったらいいのかというようなディスカッションはあまりされていないんですかね。

■堺市文化団体連絡協議会

それは個々の団体によって運営の仕方が違うと思うんです。だからそこまで介入することはしていないんですけれども。

○花村委員

逆にどうやってやっているのと聞くことはあまりないということですね。うちはこうやっているんだけど、どうやってるみたいな話は。

■堺市文化団体連絡協議会

そうですね。そこまでは介入していかない。ただその団体によってちゃんと運営がずっとつながっておりますので、その団体の長に任せるという方式でやっておりますね。こちらからこうせいあせいというのはありません。

○花村委員

こうせいあせいというより悩み相談は。

■堺市文化団体連絡協議会

それはあります。その場合は理事会がありまして、各団体から代表者が出まして、そこで13人集まる。

◎会長

よろしいですか。大体わかりました。ちょっと時間をオーバーしていますんでね。少しだけ確認したいんですが、市民に喜んでもらっていますと最初おっしゃっていましたが、それはいったいどのようにしてデータをとっておられるんですか。

■堺市文化団体連絡協議会

生の声を聞いたり。

◎会長

生の声を聞いている。肌で感じるということですね。

■堺市文化団体連絡協議会

そうです。

◎会長

それはできたらデータとしてとってください。アンケートとしてね。そうしないと個々の方が市民に好評を得ていますといっても、説得力持てないんですよ。特にこういう税金を使っている補助金の事業はものすごく大きな根拠になりますから。今後のためにもこれは大事なことだと申し上げます。各パーツごとにとってもいいくらいです。全体でもそうですし。

■堺市文化団体連絡協議会

団体全体でとらせていただいて。

◎会長

それともう一つ大事なことは、来られる方はもともと能動性が高いわけです。支持して来はるわけですね。見たいなと思って。味方の人が多いわけで。だからよいデータが出る

傾向がある。来られない方のデータをどうしてとるかということも考えていただいたら。

■堺市文化団体連絡協議会

それもなんですけれども、今回のフェニーチェでは全体でやって全然関係ない人が聞いたり見たりすることは全体でやりましたのでね。歌を聴きに来た方が茶道に来たり。

◎会長

そういうことじゃなくて。この堺市民芸術祭そのものの認識があまり持ててない人がおられるじゃないですか。芸術祭に来られる方はもともと好感度は高いと思う。その中のアンケートはそれでもとる必要はある。さらに芸術祭そのものにアクセスしない人たちをどういうふうに誘うかという問題意識で戦略考えてはどうかかなと思ったのが一つ。それからもう一つ、弘本委員から年度ごとのテーマは決められましたかとの話がありましたね。これはやる度に一つの反省とか、今年はこんな傾向があったな、こんな悩みがあるなど出てきて課題が生まれるはずなんです。その課題を来年度に向けて、こうしていこうとかあるいは克服しようという課題意識があればテーマは生まれるはずなんですよ。それはどの都道府県、市町村に行っても、課題というのを導き出すのは重要なことで、私は滋賀県の委員やったんですけれども、滋賀県の場合は美術展があったんですが、若者が全く来ないという課題が出たんです。30歳未満の応募者がゼロ。それが7~8年続いた。これはなんとかしなくちゃというのがテーマになってきました。

○花村委員

ちょっと二つ目の質問で聞きたいことが。

◎会長

どうぞ。

○花村委員

若い人が参入できないという後継者の課題があったじゃないですか。この内なる課題というのは何なんですか。

■堺市文化団体連絡協議会

アウトドア中心とか。こういう昔からの芸術文化に興味がなくなってきているのではないかと私は思っているんですが。今までだったら何年かしてそれを自分のものにする習性があったと思うんですけれども、今の方はこれをしたらずぐに答えが出るということが求められている方が多いのではないかなと思ったりします。

○花村委員

求めていることに寄り添うことはないのですか。

■堺市文化団体連絡協議会

今の人に寄り添うようにしてほしい。だから今の人に合うように方針を変えて、やっているところがあると思いますね。

○花村委員

例えばどういう風に。

■堺市文化団体連絡協議会

例えば先程言いましたように、今の時代に合うように、お花とかお茶の感覚を変えらるという。お花なんか大きな芸術的なものをしていましたが、それはちょっとできないと。今の時代に合うフラワーアレンジメント。

○花村委員

表現的なところに工夫はあると思うんですけど、例えばそのマネジメント的なところにアプローチするようなことはしていますか。

■堺市文化団体連絡協議会

やっているんですけどもなかなか人が集まりにくいというか。それをもうちょっと考えていかないとと思うのですが。

○砂田委員

いろいろお悩みがあるかと思うのですが、これを打開していくにあたって、より多くの人に参画していただく、あるいはお客様になっていただく、この辺はさきほど実施主体とかそういう言葉が出てきましたけれども、事務局である財団と相談したりあるいはアドバイスを受けるとかですね、そういうようなコミュニケーションはございましたか。

■堺市文化団体連絡協議会

あります。

○砂田委員

財団はコンサルタントのようないろんな知恵を授けてくださるような働きはあったでしょうか。

■堺市文化団体連絡協議会

すみません。

◎会長

すっと答えられないというのが答えです。ほかありますか。

○上田様

まだ頭が整理できていないんですが、財団の話が出てきましたね。本来ならば、誰がそれを、それっていうのは若い人の参画であったり後継者であったりということを、誰が主体的にしていくのがいいと思っているのでしょうか。

■堺市文化団体連絡協議会

それはその団体がすべき。

○上田様

団体がすべき、とお考えなんですね。

■堺市文化団体連絡協議会

そうでないと他からいってもわからないことがあるでしょうし。団体がまずかためていかないと。団体というのか踊りなら踊り、邦楽なら邦楽でちゃんと自立していただかないと。

○上田様

その団体が110あります、その連絡協議会は何をするのですか。

■堺市文化団体連絡協議会

それを持ち寄って、理事会でちゃんとしていくという。私は、この組織が文化で委員の皆様はどうやっていくのかということをお問われても、果たして市民の皆様はどうせいこうせいということをおなかなか言えないですよ。だからその答えは私たちだけに求められても困る。

○上田様

じゃあどうしていきたいのでしょうか。

■堺市文化団体連絡協議会

例えば行政に生涯学習課があるとか、いろんな区役所があるとか、地域のサークルだったら区役所に行けば何かわかるなとか、生涯学習課が堺のサークルの、文化団体とかいろんなサークルのことがわかって相談に行ったらわかるという窓口を作ってもらうことも大事であって、私たちのわかる範囲で来られたらサークル的なことは教えますけれども、堺の文化にどう私たちがアプローチしていくかというのは、限界があるようには思います。努力はしますけれども。それは行政と一緒に堺の文化を持ち上げていく情報を広く提供していくということがいるのかなと思っています。

◎会長

というのが答えだと思います。じゃあよろしいでしょうか。どうもありがとうございます。市長から、堺市の補助金のあり方について点検検討して、今後どうあるべきかというのを答えを出してくださいという諮問が出てるんです。だから私たちもどうしたらいいのかということと一緒に考えたいと思っていますから。

■堺市文化団体連絡協議会

一番の目標はやっぱり若い方を育成していくということなんですよ。

○花村委員

そうですね。

■堺市文化団体連絡協議会

子どもたちもできるようになってくる。やっぱり習慣もありますし、靴の脱ぎ方一つでも結構できるようになるのを私たちは信じています。子どもたちの力を。

【与謝野晶子顕彰事業】

<事務局より説明>

<与謝野晶子倶楽部より説明>

◎会長

それでは質問に移ります。砂田委員。

○砂田委員

基本的な質問をまずさせていただきます。平成9年から活動されているということで、年間の事業のラインナップを見ましても、いろいろ多彩だなと感じているんですが、ただこの毎年やっていてだんだんそのネタが重なることになってしまうのか、ネタは尽きないのか。その辺が市民の方なり市外の方にとって、新鮮さがあるかどうか、その辺も取り上げる内容としてはかなり似通っている部分というものはございますか。

■与謝野晶子倶楽部

たしかにご指摘のように長年、講座をやっていますと似たものももちろん出てきます。毎回その都度参加者の方にアンケートを取っております。例えば直近の例で言いますと、堺の町の歴史文化、それから利休や晶子を育んだ風土のことをもっと知りたいとか、それから堺の人物の話をもっと聞きたいとか、そういう具体的な要望がありますので。毎回趣向は考えているつもりでございます。

○砂田委員

そういう工夫をし始めたのはここ何年くらい。

■与謝野晶子倶楽部

具体的に言いますと利晶の杜が今年開館5周年ですけれども、利晶の杜に晶子記念館ができましたので、そこでの共催事業という試みから具体的にご指摘のように取り組んでおります。

◎会長

ありがとうございます。花村委員。

○花村委員

機関誌について聞きたいんですけども、機関誌は会員以外に配られているのでしょうか。というのは事業補助金の対象の中で機関誌の発行はかなり占めているんですね。堺市補助金が充当されているお金が結構あるんですよ。これが会費収入だけではいけないのか。ほかの会費を払っていない人たちにも配られるものなののでしょうか。

■与謝野晶子倶楽部

機関誌につきましては、会員には無料配布するとともに、文学関係者や市内の図書館であるとか、市内の大学機関であるとか、あとは市内の小学校に配布、こちらは希望する学校なんですけれども、そちらにも配布しております。

○花村委員

無料で配布している。会費収入だけで賄えないのですか。会費収入が127万あって、機関誌の発行が71万円なんですけれども、要するに会費払った人が機関誌をもらうという形では運営できないのですか。税金を投入するところの意義みたいな話がどうしたらいいのかなと思うのですけれども。

■与謝野晶子倶楽部

ご覧いただいておりますとお分かりになるとおり、かなり機関誌としては内容も装丁も含めて費用的にはかかっておりますけれども、それに見合う費用対効果はあるかなと私たちは自負しております。会員の方はもちろん配布しておりますので、それ以外に関係の文化団体にこういう事業をやっていることをご理解いただきたいということで、寄贈という形になっておりますけれども。

○上田様

何冊作ってらっしゃるか。

■与謝野晶子倶楽部

700冊です。

○上田様

1回 700冊。多くないですね。

■与謝野晶子倶楽部

かなり活用させていただいているつもりです。広報の一つの役割を担っていますので、目に見えない形で堺市の文化発信に貢献しているとは思っております。

○上田様

引き継がせてもらいますと、無償であるということであれば、これを PDF にしてネットに挙げてみるともっと広く見てもらうこともできる。

■与謝野晶子倶楽部

そうですね。将来的にはそういうことも考えて。

○上田様

せっかくですしね。

■与謝野晶子倶楽部

時間に余裕がございませんけれども、地元の小学生に短歌を作ってもらうコーナーを設けていまして、次世代の人たちに晶子の魅力を伝えていくということで、このコーナーはかなり評判がありますので。

○花村委員

会員、好きな人だけでやっていったらいいんじゃないかという話。広く発信する、税金を使って広く発信するのに 700冊しか刷られていない。それがどうやって届けるのか、その意義を見出したいと思っているんですが。税金を投入することの意義を。そのあたりはどう考えているのでしょうか。

■与謝野晶子倶楽部

そうですね、部数的にはもう少し拡大できればいいと思いますけれども。ずっと続けてきましてこの辺が妥当なところかなと。

○花村委員

その中で会費収入だけで 700冊刷るというのは可能なんじゃないでしょうか。堺の市民の方々に広めるというのは。

■与謝野晶子倶楽部

これだけではありませんので。税金を全部当てているわけではないので。ほかのイベン

ト、講座、すべて含めてのトータルな発想ですので。

○花村委員

割合が大きいんですね、半分使っているんですから。それをどう思っているのか。

■与謝野晶子倶楽部

今年2回発行している。これを年1回にする。

○砂田委員

その理由は。

■与謝野晶子倶楽部

補助金の有効利用ということで考えております。

◎会長

はい。ではどうぞ。

○弘本委員

補助金の目的というところで要綱を見ますと、市民参加型の研究をこういう組織として発足してということで、市民を巻き込んで市民と一緒にというところがかなり高く謳っていると思うんですね。これは一方で、これは私は全然悪いことだとは思っていないんですけども、組織の体制としては、そもそも名誉会長の方も運営の方々も、かなり専門家のの方々、あるいは言葉は変かもしれませんがハイソな方々で固められていて、これはクオリティが高いものをつくって、これはアカデミック、そういう意図としてはよくわかりますし、利晶の杜の企画展の協力までされるわけだから、そういう担保は絶対必要だと思うんですね。ただ一方で市民参加型という話に戻ると、この方々だけではちょっときつい部分もあるのではないかと。もう少し市民を巻き込んでいくということに、経験豊富な方とか、まちの文化そのものに根が広く向かっている方とか、そういう団体とともに一緒に企画されると、もっと広がっていく道筋が見えてくるのかなと思うんですけども、その辺は議論の中に出てきたりとかあるんでしょうか。

■与謝野晶子倶楽部

今ご指摘のとおり、アカデミックな部分と、それからいわゆる普及、啓蒙の両面を私たちは絶えず考えながらしております。そういう意味ではもっと幅広く、もっと市民の一般の方々に浸透する努力をしていかなければ。おかげさまで利晶の杜ができておりますので、そこを拠点に、従来よりもさらに市民の方の関心が強まってきていると思っております。

運営委員は専門家の方が多くですが、会員はそういう方ばかりではありません。

#### ○弘本委員

もちろんそれはわかっています。ただ運営委員というのは重要な役割ですよ。運営を考えるにあたってもう少し幅があった方が。個人的な意見ですが、幅があった方が目指されているところに、今課題と置いていらっしゃるところに、目を向けていったり機動力をつけていったりするには、可能性の芽が見えてくるのではないかと。高齢化の問題とか、会員拡大の問題とか、一生懸命努力されていることはご説明の中で成果も上がっていることも理解しましたけれども、その与謝野晶子という存在が持っている力の広さとか魅力からすると、もっと 770 人とかではなく、参加者にしてももっと反響があってもおかしくないと思うんですよね。ですのでぜひ広げていただけるように考えていただければということをご心から思って申し上げたんですけれども。その辺の実態をお聞きしたかったのです。

#### ■与謝野晶子倶楽部

利晶の杜をメイン会場にしているんですけれども、残念なことに講座室の定員が 40 名なんです。だから本来例えば 100 名集客できるようなイベントをしたいと思っても、40 名が満席ですのでその辺がちょっと限界なんですね。だからもっと広く裾野を広げたいという気持ちがあるんですけれども、会場の面で。

#### ○弘本委員

例えばそれは利晶の杜だけを会場にしないという方法もあります。例えば市民が企画を考えてそれを運営委員のプロの方が専門家の方々が応援するとか、というようなやり方で広げていくというやり方もありますよね。そんなことも今後は少し考えていかれたらいいのかなと。せっかくこれだけの知恵を持った方々が集まってらっしゃる、なかなかほかの都市ではない財産だと思いますのでもっと活かしていただけるといいのかなと。

#### ■与謝野晶子倶楽部

例えば美原とか、堺市も広いですからね、そういう中心部だけではない、外へ転換していく必要はあるんでしょうね。ありがとうございます。

#### ◎会長

では上田さんどうぞ。

#### ○上田様

私自身が与謝野晶子に非常に思い入れがあって、なお申し上げるんですけれども、もっと晶子はダイナミックな気がしていて、例えば今の時代はこれがあることを喜ぶかというところと違ったり、SNS もありますよね、そういうところに書き散らしていったり、ZINE（ジン）と言ってペラペラの紙が何千枚と配布されていくとか。それが外国語でも記されているとか、何かそういうこともあるかもしれないと思って、研究していくことと、やはりそういう活動していくとか、展開していくということは、そういう

のが好きな方がメンバーの中にいると、積極的にやってくれるのかなと思っていました。それとこの文芸という枠の中にある気がするんですけども、例えば男女共同参画であったりとか、ほかの部局とも連携して、堺の中でいろんな実は、晶子の考えている思想だったりとかそうしたものが浸透していくこともすばらしいことじゃないかなと思います。

#### ■与謝野晶子倶楽部

もともとこの倶楽部が発足した一番の原点は、今ご指摘の男女共同参画が堺市に立ち上げたと同時に並行したものです。だから今でいうジェンダーフリーの問題は当初から意識して、この倶楽部を立ち上げました。それからごく直近でも堺市は人権担当者という若手が人権について考えるというプロジェクトチームを作ることやっております、その中でも今年度、一つの班のテーマとして与謝野晶子の人権としてそういうのを進めて、晶子というのが会長おっしゃいました男女共同参画の先駆者でございますので、それをテーマにして、幅広く晶子の関しての切り口で研究と言いますか、関わっているところでございます。

#### ◎会長

よろしいですか。では追加の質問あれば。

#### ○砂田委員

多彩な活動とは感じているのですが、収支予算書を見れば、150万円の補助金も妥当かなと思うんですが、ただ多彩とは言いましたが何かやはり中途半端だと感じていますね。2つあります。一つはもっと論文として学術的に学会組織としてそういう方向性をする必要も、与謝野晶子さんはもっと国内、海外に発信するためには必要なんではないかと思って、もっとより専門性。それから約200人いる会員の方たちが例えば利晶の杜で語り部として展示のところにいらっしゃるなど、いわば観光ボランティアさんみたいなそういう形になると、訪問者たちにももっと伝わっていくのではないかと、そういう可能性がないんだろうかという感想なんです。ではこの150万円の方なんですけれども、実はこの金額だけでいうと健闘していると思うんですが、実は市の職員の方が2名もさらについていらっしゃると、そこに対する人経費を考えると非常に大きな金額になってしまっている。ですから今のままだと中途半端なので、大胆な舵を切る必要があるのではないかと考えています。今市の職員の方は年間何日くらい、何時間というのはちょっと難しいかもしれませんが、どのくらい従事されてらっしゃるんですか。事務局として。

#### ■与謝野晶子倶楽部

事務局として専属で再任用職員を1名、アルバイトを1名という形で従事しております。晶子だけというわけではないんですけども主に晶子が8割、9割くらいは、そういう部分での人件費はかかっていると思っております。

○砂田委員

そうですね。やはりより一層大胆な舵を切っていかれるといいなと感想を持つんですけども。

■与謝野晶子倶楽部

今先生ご指摘の、学術的な面なんですけれども、確かに実は立ち上げの時にそういうアイデアもあったんです。ただその当時の市長から、これは広く堺市民に晶子の顕彰を広げていく、そういう組織づくりを目指してほしいという要請をいただきましたので、あえて学術的な面は二の次三の次という実態で今日まで来ています。ただ私も全く同意見で、そういう面では物足りませんので、共同調査研究部会を立ち上げました。説明させていただくと、与謝野晶子の新新訳源氏物語の草稿が、全部で 500 枚くらいあります。それは全部堺市が所蔵されております。実は平成 22 年にそれが遺族から堺市に寄贈されたんですけども、まったく今現在まで手つかずなんです。草稿ですから下書きの原稿が読み解けないんですね。本当の手書きです。それで私は貴重な資料なので、10 年間手つかずだったんですけども、それを何とか読み解きたいということで、共同調査研究部会を博物館の学芸員の方と共同で立ち上げました。今年度その報告書をこの 3 月までに出すつもりでおります。そういう風にまた地道な仕事ですけども、与謝野晶子の関係は 2,000 点ほど実は堺市に所蔵されております。2,000 点の大半が実は未整理なんです。公開はされていますけれども、資料的価値をきちんと後付している学術的なことは実は今までほとんどされていなかったんですね。晶子倶楽部はその一翼を担わせていただこうと思って 2～3 年前から動き出してまだ成果がこれからですが、そういう思いは持っているんです。

○砂田委員

ぜひ国内外発信を力強くされて、今は関西空港についてもそのまま堺を素通りして京都に行ってしまうわけですけども、京都へ行く前に堺へ寄るアピールが必要ではないかなと思います。

■与謝野晶子倶楽部

私は晶子の魅力は国際性だと思っているんですね。晶子はやっぱり、おそらく堺市で誇るべき国際的発信というところ、千利休と与謝野晶子だと思いますので、やっぱり晶子をうまくテキストにして、国際発信はできると思いますので、世界にアピールできると思っています。

◎会長

よろしいですか。ほか追加はありませんか。

○花村委員

税金は適切に使われないといけないんですけども、様々な団体がその中にいると。そ

の中に助けてほしい団体はたくさんいるわけですね。なのでどこかの段階で自立していただかないといけないときがあると思うんですね。だからスタートアップの時は補助していくという話はあると思うんですけども、より多くの人を巻き込んで魅力を分かっ  
ていっていただく。それでわかっていただくと、逆に補助金に頼らなくてもみんなが賛同  
して会費が増えるとかいうようなステージに入っていく、そのための努力としてどうい  
う努力があるのか、そのあたりを工夫というか、日々考えておられると思うのですけれ  
ども、将来的にそういう方向性に進んでいかれるという意味というか、それはいかがでし  
ょうか。

#### ■与謝野晶子倶楽部

実はご指摘のように、さかい利晶の杜が5年前にできるときに、そういう自立の道を課  
題として検討しました。できるだけ自助努力で運営できるように、そういう方向性を検討  
いたしました。ただ利晶の杜がせっかくできて、それがぼしょってしまうようではとい  
う意見が出ました。つまりその与謝野晶子記念館ができて、その中身を充実させるため  
の企画展、企画展のノウハウは学芸員の方が熟知されておりますが、より専門的な、それ  
からより一方で晶子愛好者に伝える、そのルーツを一番私たちが知っているつもりでおり  
ますので、そこでの協調。だから学芸員の方との共同事業というのは大事にしております  
ので、むしろ逆に今密着している状況ですね。一度離れようと思いましたがけれどもむしろ  
晶子記念館ができてからますます、晶子倶楽部の必要度といえますか必要性は評価されて  
いると思っております。もう少し言わせていただくと、堺市のHPを開けていただきますと、  
観光・歴史・文化というバナーがございます。観光・歴史・文化のバナーを開けると、何  
が出てくるといいますと、文化・芸術の細項目が出てきます。文化・芸術の全部で15項目  
あるうちに、与謝野晶子顕彰事業というのが出てきます。そこからの与謝野晶子が出てく  
るところは3つなんですね。一つは先ほど言った草稿の資料のこと、もう一つが与謝野晶  
子倶楽部の紹介、もう一つがさかい利晶の杜。この三つが出てくるんですけども。とい  
うことは晶子顕彰を外部から問い合わせると、どこへリンクするかというのと与謝野晶子倶  
楽部にリンクすることになっているんです。私から言わせるとこれは堺市の任意団体です  
けれども、公認団体という自負を持っています。

#### ○花村委員

堺市の中に入ってしまうということもあり。例えば。

#### ■与謝野晶子倶楽部

私は堺市の文化行政の中で、公認されている文化団体だと自負をしています。つまりそ  
の堺市のHPを開けると晶子顕彰に関しては与謝野晶子倶楽部がメインなんです。そうす  
ると外部の方が堺市のHPを開けられたら、与謝野晶子に関しての問い合わせは与謝野晶子倶  
楽部という形にならざるを得ないんです。今のシステムでは。だからその辺で私たちは行  
政から離れようと思いましたがけれども、むしろ行政とより密着に連携していくべきだとい

う考えに変わりました。これが今の現状です。

◎会長

すいません。ちょっとタイムオーバーなので。

■与謝野晶子倶楽部

すみません。

◎会長

わかりました。私の方から。今ご意見伺ってつくづくよく考えたんですけどもやっぱり全体のマネジメントが少し混線していますよね。利晶の杜の運営、博物館の運営方針と、与謝野晶子倶楽部の貢献度を考えたときに、補助金でなくて委託料であるという展開だあってあり得るんですよ。それを行政内部でどれくらい子細に検討されたのか。だから補助金であることが健全なのかどうか、いわゆる行政の仕事を代行してくれている。委託料が適正な場合もあるんじゃないのということをもう一度検討いただきたいと思います。それであるならばきちっと仕様書を定めて、こういうことをやってくださいという風にやらないといけない。それからみ出る部分については自分たちの自主的な活動としてやってくださいという仕分けがいると思うんですね。そこところが少し未整理ですよ。だから機関誌の発行なんかは、いわゆる補助金で行われている自主活動なんですけれども、実はこれを利晶の杜の活動の一環としてみなすというとまた性格が変わってくる。我々委員として頭の中が混線し始めているんです。だからこれは行政のスタンスを決め直していただきたい。これが私の今日の見解です。私個人の意見としては、与謝野晶子倶楽部の存在というのは非常に貴重だと思いますが、完全に民間でお願いしますというところと、いやそうではなく利晶の杜です、いわば賛助団体として仕事を手伝ってくださいというのと、二つが入っているので、その辺を整理した方がいいかな。それとこれだけの立派な団体が、やっぱり幡谷さんのときはそこまでという話だったかもしれませんが、先生が会長でおられる間に学術団体として、もう一遍基礎を固められた方がいいと思います。その方が堺としては非常にプライドをもって活動組織になってくるのではないかな。

○花村委員

すべての芸術を市場原理に持っていく必要はないと思うんです。本当に大事な活動を、市が認識して、堺市の財産として認識するのであれば、堺市が税金を投入することは必要なことだと思う。むしろ市場原理に乗らないもので大事なものを税金を投入する意味がある、それを補助金という枠組みになるとなかなか難しく、団体に補助していかないといけない。それは一個一個自立していったいかならないといけなくなると思うので、だから僕が思ったのはそれほど大事な価値を持っているのであれば、補助金ではなく堺市の業務としてきちっと位置づけて委託料として出していくこともあるんじゃないか。

○砂田委員

そうしますとすでに倶楽部として持たれている蓄積した内容とかは、企画展として、全国の文学展に巡回して回していくとか、企画を売っていくことは。

■与謝野晶子倶楽部

可能でしょうね。実は近代文学研究における資料の活用という資料集があるんですけども、堺市の晶子記念館のことが紹介されています。ここでもはっきりと与謝野晶子倶楽部との共同連携によって企画展を充実させると評価されています。先生おっしゃるようにそういう巡回も可能だと。

◎会長

文学館とネットワーク持って、それと交換していけばいい。いろいろ演目をね。

■与謝野晶子倶楽部

特に晶子の場合はできると思います。

◎会長

神奈川の近代文学館なんかでも、受けて立つと思いますよ。

■与謝野晶子倶楽部

そうですね。

◎会長

そういうマーケティングというのかな、もっと努力しないと。そのマネジメントするのはだれか、そのマネジメントの責任者は。この会にさせるのは少し酷でしょう。その話をしているんです私は。そこまでステップアップさせて、堺の誇り、観光資源としてとなるなら都市戦略として行政がもう少しきちっと政策を示さないといけない。そうするとやっぱりそういうマネジメントをするという業務を仕事として起こして、晶子倶楽部にはここまでお願いします、ここから先は行政がやりますというね、仕分けしないとイケないという気がしますね。だから今日は思いのほか深い問題が出たと思います。前者の話と今の話も共通しているのは全体の事業マネジメントの能力とか機能が見えない。それがためにこういう狭間にはまってしまっている仕事があるということが見えてきました。だから単にお世話するというのではなく、行政が手を出さず限りきちんとマネジメント、一体だれがするんだということを決めて、行政がするのは手に負えないというならマネジメントも外部化したらいいいんですよ。マネジメントしてくれる人材を短期でお願いするとか、あるいはマネジメント会社に任せるとかした方がいいと思いますよ。あるいは財団の中でそういう専門機能を持った部隊を育てるとか。そういう方向じゃないですか、今日の話は。単に補助金とかを透明度を高めるとかどれだけパブリックバリューがあるんだということを判

定するだけじゃなくて。これは私は非常に貴重な資産ではないかという気がしたので。以上です。どうもありがとうございました。

●事務局

12時までとなりますので、時間がありませんが今日のまとめを。

◎会長

それでは審議は終了しますが、各委員から参考に一言ずつ。ポイントなり何かありましたら。花村委員。

○花村委員

はい。ありがとうございました。二つあって、団体に対する補助という考え方と、事業に対する補助、堺市の市民芸術祭を開催するための補助。本来は補助、開催事業の費用自体が、堺市民にとって広く公益を得るものであるのが審査基準になると思うんですけども。それを考えていくうえでも団体の姿勢であるとか、団体の考え方みたいなものを、セットで考えていかないといけないと思うんですけども、そのあたりが非常に難しいという風に感じました。というのは長くこういうスキームが組まれる前からずっと常に団体として補助を受けてきているという方々なので、認識を今後新たにするのが難しいというのを非常に痛感しました。どこも皆さん苦労されているんですが、参入できないとか、それは彼ら彼女たちではなかなか課題ということを知っていたとしても、どうやってアプローチしたらいいのかというのがわからないところがある。専門家の育成みたいなことが非常に重要になってくるでしょうし、そこは外部の力を借りなければいけないと改めてこの堺の件で感じました。

二つ目が与謝野晶子のときに言いましたけれども、税金のスキームの話だと思うのですが、補助金のスキームというのはやっぱり特に開催事業に対して補助をするというのは、自助努力を見込んで補助するという部分があると思うんですね。要するに補助をすることによって最初は助けてあげる、スタートアップしてあげる。それを大きく育ててくださいという話だと思うんですね。与謝野晶子の話もそうかもしれませんが、それだけ価値があるということであれば、多くの人に参入してもらって、金も集まってくるだろうというスキームができる。補助金というスキームができる。一方で補助金ではないスキームとして、芸術そのものが市場原理に乗っていかないものがたくさんあると思うんですね、だからこそ意味があるという部分も思うんです、そうでないと、流行るものとか、人の注目を集めるものだけが価値の高い芸術だという認識になってしまうのは非常に危険な流れ、逆に受けるものを作ってあげれば良いという話になってしまう。そうではなくて、芸術の本質の中には、人間が見たくないものであるとか、あるいは向き合いたくない大事なことであるよねということや浮き彫りにしたりするそういう価値観があると思うんですけども、そういうものに対して担保していく公共性、なので与謝野晶子の話もそうですし、必ず芸術ってたくさんある、そういうものを堺市が深く考えて、これは本当に市民にとって必要と

いうことであれば、これを全面的にバックアップしていくというのは、あると思う。それは補助金のスキームではなく、委託であるとか堺市の事業として全面的に応援するか、そのあたりの整理というのが必要になってくるんじゃないかと思いました。

◎会長

はい。では砂田委員どうぞ。

○砂田委員

簡単に言いますと2つともですね、やはり市民にマネジメント力を育成させていかなければいけないと感じているんですね。私はかつて市民文化祭の実行委員長とかをしていて市民文化団体の硬直化するのを見てきた中でそれを活性化していったわけですが、それはやはり、市民に運営を担っていただくということによって、運営力をつければ社会との隔たりというものを自覚して自分たちの活動のあり方を見直していくという風になってくるんですね。一つ目の団体のときに予算の細かいことを聞きましたけれども、財団がアルバイトを発注しているということは、これは協議会がその中で各団体からそういう作業する方を出してもよければ、あるいは発注する形にして、自分たちでマネジメントしていくという形ができると思うんです。先程コンサル的な要素はいただいてなかったんですかという問いになかったと、これは財団に専門人材がないからできないわけですね。だったら市民にもっと責任を持っていただいて、主体的な活動という風な方向性を出していくことが、やはり条例の精神ですし、文化協働体を作っていこうということだったので、もっと市民に責任を移譲して、主体的な活動をしていくことが必要ではないかと思いました。

◎会長

はい。では弘本委員。

○弘本委員

前者の市民芸術祭の方は詳しくはお聞きできませんでしたが、そもそもの発足の経緯、後半の与謝野晶子の方もそうですけれども、発足の経緯でおそらくこういう事業を行うにあたり受け皿になってほしいという、どちらかというようお願いされてやりましたというストーリーがそもそも最初にあって、そこからなかなか抜け出せないという状態が引きずられているのが最大の問題だと思うんですね。だからここは一度見直す時期にあるということを十分に理解していただくことが大事だと思いますし、そのうえでやってきたことの意義は何なのか、これから解決していけない問題は何なのかということとちゃんと話し合っていくということが、とても必要なことかなということをお話を聞きながら、どちらのケースも改めて思いました。やはりこの団体、この事業をする上で何が重要なことなのか、それが会員の親睦だけで終わってはだめなわけですよね。それをちゃんと社会に返していくということがどういうことなのかということと、きちんと位置付け直していく

時期に来ていることを、一番対話で明らかにしていくということが重要なと思いました。

◎会長

ありがとうございました。上田さん。

○上田様

委員の皆様が話してくれたとおりで、とりわけ弘本委員がおっしゃってくれた中から、それをどうやって気づいていくのか、そしてそれを団体の活動なり個人の活動に生かしていくのかというところは、今すごく貴重な一言で、対話を重ねるということだったんですね。やっぱり対話者が必要なわけで、この対話者はだれなのか、それぞれ一緒に活動している人たちなのか、それともほかの団体の人なのか、また行政の方なのか市民の方なのか、対話の場をどう作りこんでいくかをやはり考えないといけないと思いました。

◎会長

ありがとうございます。皆さんおっしゃったとおりで。それに付け加えて言うなら、与謝野晶子短歌賞はなぜ休止されてしまったのか。もともとはこの与謝野晶子倶楽部の人を中心に言い出して産経新聞が引き取って、十数年やったわけですが、産経が撤退したんですよね。だったら自力でやれないのかのと。そうすると倶楽部が主催になるのかと。いうことも政策的な展望としてあるんじゃないですか。

●事務局

そこは次年度から、高校生を対象とした短歌大会を計画しております。コストがかかりますので、手弁的に、小さく初めて大きくしていくという考えです。

◎会長

そういうことならいいです。この両団体ともに、つくづく痛感したのは、事務局を担っている行政なり財団と、団体との間の距離が空きすぎ。一方はお世話させていただいてますで止まっているし、もう一方はなんで私たちがこんなことしないといけないねんと。役所はなかなかかゆいところに手が届くようなことはしてくれないやろうから、これはおかしい。どちらもマネジメント能力に欠けているんですよ。どっちもがマネジメントに対するセンスがないから、お互いに意思疎通がなくだんだん離れていくわけですよ。いつも言うように、財団にもアートマネージャーを育てないといかん、市民の中にもアートマネージャーを育てないといかん、あるいは地域コーディネーターを育てないといかん。財団の職員、文化課の職員の地域コーディネートを持った職員がね、お互いにそういう能力を持っていると対話が可能になる。歩み寄りがね。そういうところを全然投資してこなかったつけがここに来ている。これを交通整理しようとしたら結構な血が流れますよ。あんたらでやっていることが公益性あらへんから、補助金打ち切りでっせみたいな話になってしまいかねない。そうすると文化団体連絡協議会の人たちはものすごく傷つきますよね。そう

いう交通整理は僕はしたくない。晶子倶楽部もそうです。むしろ今までやってこられたことを評価して、そのうえで堺のために何かもっと力貸してよというメッセージを送れるような解決の仕方、ステップアップの仕方をこの補助金の会話を通してすべきじゃないかな。でもそれをやったところであと数年で倒れてしまうわ。高齢化のために。一方はね。一方は先生がいなくなったら終わりですよ。だからそれをどうするのという危機感をもって、団体の次のステップに向けた誘導というか、あるいはそのアドバイスとか、マネジメントをしていく努力をしないとものすごいややこしいことになってしまう可能性がある。単に無駄な補助金をやめなさいというようなえげつない話じゃないと思います。そういう政策的なセンスのなさというかね、ここにきていると思う。この十数年間。地域の市民の中にもっとマネージャーが必要だというのはこの数年前から言っているけど、一向に予算措置されない。財団にも。財団も吸収しない。なので今回釘を刺しておきます。きちっとやってもらわないと、同じ問題がまた起こりますよ。補助金を召し上げるといような話にできるだけしたくないので、これをきちっといい形で展開されたら市民も支持してくれると思うんですよ。楽しいなって、やってくれてるなって。ぼくたちもああいう風にして例えば邦楽勉強したいな、どうしたら入れるんやろうというなね。琴弾いてみたいなとか尺八弾いてみたいなとか言って、子どもたちが思えるようなそういう誘いができるような芸術祭であってほしいし、そうなっていないのがなんでなんやという話。つまり双方に持つマネジメント能力がゼロというのが問題です。どっちもがね、行政が悪い、団体が悪い、と腹の底の不信感を持ってる。これは不幸です。

●事務局

ありがとうございます。今回議論していただく中で、本日実施主体に対するヒアリングということだったんですけれども、やはり補助する側の姿勢というの、これは私たちが問われるところになりますので、その答えをしっかりと持つかないといけないというところは重々わかっているんですけれども、行政には行政の諸事情がございまして、なかなか市内の交通整理が難しいところでもございます。けれども会長、委員がおっしゃっていただいているように、やはりマネジメントというところも不十分でございまして、上田様からの質問に、なかなか理解できておらず、答えがなっていなかったと思うんですけれども、要はそういうご質問いただいたときに、明確に答えられるような団体になっていただくように財団としっかり取り組んでいかないとということ、今日は重々わかりました。次回もよろしくお願いいたします。

◎会長

ありがとうございます。

●事務局

次の第2回の部会を3月19日の木曜日の10時から開催を予定しておりまして、舞台芸術創造発信事業、堺シティオペラに対する補助金、美術協会展に対する補助金について、

検証していただきたいと思っておりますので、ご出席のほどよろしくお願いいたします。  
第3回につきましては4月を予定しております、第3回の部会は4月に開催し、堺市文化振興財団事業補助と負担金事業の検証を行いたいと考えております。最終第4回の部会は5月につきましては、取りまとめであったり補助のあり方であるとか、方向性について答申書の案の審議を行いたいと考えております。4月、5月につきましては、おって日程調整をさせていただきます。事務局からは以上です。

◎会長

はい、ありがとうございました。それでは、本日は以上といたします。皆様お疲れ様でした。

**閉会**

---